

吉田宗恂『歴代名医伝略』の諸版

島野達雄

2012年度の武田科学振興財団・杏雨書屋研究奨励を受け、吉田宗恂が著した歴代名医伝略の諸版本を研究する機会を得た。その成果として、一、諸版の書誌事項、二、古活字の字形、三、異体字の使い分け、四、字種の異同、の印刷技術にかかわる四点を報告し、諸版本相互の関係を論じる。五、地円説の伝来では、無刊記本の一箇所だけにある衍字にもとづき、時代背景や著者の意図を考察する。

一、諸版の書誌事項

歴代名医伝略（二巻）は、豊臣秀次に仕え、後陽成天皇を治療し、徳川家康の侍医となった吉田宗恂（永禄元年（1558）－慶長十五年（1610））。号は意安（意庵）、又玄子）の著作である。上古の伏羲から、明の龔信とその子龔廷賢まで、中国歴代の名医約四百人の伝記が記されている。

刊本はABCDEの五種が現存する。所蔵館を次に示す。

A 無刊記古活字本……………杏雨書屋、宮内庁書陵部、東洋文庫岩崎文庫（三館のみ）

B 元和三年（1617）古活字本…杏雨書屋、石川武美記念図書館成篁堂文庫（二館のみ）

C 寛永三年（1626）古活字本…国会図書館、京都大学図書館（二館のみ）

D 寛永九年（1632）整版本……上田市立図書館花月文庫、西尾市岩瀬文庫、陽明文庫（三館のみ）

E 寛永十年（1633）整版本……ベルリン州立図書館、国会白井文庫、京大富士川文庫など
杏雨書屋が所蔵する寛永十年（1633）整版本（杏 1227）の目録、本文、刊記はEと同版だが、序文は、Eの姜沆序・又玄子序の順に対し、又玄子序・姜沆序と入れ替わっている。

コピーを入手した五種の刊本の所蔵館（請求記号）と書誌事項を列挙する。

A 杏雨書屋蔵（貴重 545）無刊記総漢字古活字本。

版元不詳。外題=名醫傳略。内題=歴代名醫傳畧・法眼意安恂撰。柱題=名醫傳略。構成=姜沆序（十九字十一行／半丁）二丁半・又玄子序（十七字十行／半丁）一丁・上巻目録三丁・上巻本文七十三丁・下巻目録三丁半・下巻本文八十七丁半。各目録と本文は十八字十行／半丁。匡郭上下左右双边。序題と目録題は一字台頭。各年代は二字下げ。各人名は三字下げ。行間に罫線がある。縦二十七・五センチ横十九・五センチ。

B 杏雨書屋蔵（乾々 140）元和三年（1617）総漢字古活字本。

版元不詳。巻末刊記=于時元和丁巳姑洗上弦日刊行。外題=名醫傳畧。内題=歴代名醫傳略・法眼意安恂撰。柱題=名醫傳畧。構成=姜沆序（十七字十一行／半丁）二丁半・又玄子序（十七字十一行／半丁）一丁・上巻目録三丁・上巻本文六十六丁・下巻目録三丁・下巻本文八十丁。各序文、目録、本文は十八字十一行／半丁。匡郭上下左右双边。行間罫線なし。序題と目録題は一字台頭。各年代は二字下げ。各人名は三字下げ、○

印付き。縦二十八・二センチ横二十・二センチ。

C 国会図書館蔵 (WA7-150) 寛永三年(1626)総漢字古活字本。

卷末刊記=寛永第三歳舍丙寅季春良日梅壽重刊。外題=歴代名醫傳。内題=歴代名醫傳略・法眼意安恂撰。柱題=傳畧。構成=姜沆序(十七字十一行／半丁)二丁半・又玄子序(十七字十一行／半丁)一丁・上巻目録三丁・上巻本文六十六丁・下巻目録三丁・下巻本文八十丁。各目録と本文は十八字十一行／半丁。匡郭上下左右双边。行間罫線なし。序題と目録題は一字台頭。各年代は二字下げ。各人名は三字下げ、○印付き。各人名の上部に出典を示す頭書(頭注)がある。縦二十七・八センチ横二十・三センチ。

D 上田市立図書館花月文庫蔵 (30-1, 2) 寛永九年(1632)訓点つき整版本。

卷末刊記=寛永九壬申応鐘良辰田原仁左衛門梓行。外題=歴代名醫傳略。内題=歴代名醫傳略・法眼意安恂撰・門人梅壽宗和刊行。柱題=傳畧。構成=姜沆序(十七字十一行／半丁)二丁半・又玄子序(十七字十一行／半丁)一丁・上巻目録三丁・上巻本文六十六丁・下巻目録三丁・下巻本文八十丁。各目録と本文は十八字十一行／半丁。匡郭上下左右双边。行間罫線なし。序題と目録題は一字台頭。各年代は陰刻(白抜き)二字下げ。各人名は三字下げ、○印付き。出典を示す頭書(頭注)表示は梓つき。序文、目録、本文のそれぞれの漢字は、C 寛永三年古活字本と同じ位置に整然と配置されている。訓点(返り点、豎点、句点、片仮名添え仮名)つき。縦二十八・八センチ横二十・四センチ。

E 国会図書館白井文庫(特 1-83) 寛永十年(1633)訓点つき整版本。

卷末刊記=寛永十年十一月吉旦田原仁左衛門刊行。外題=歴代名醫傳略。内題=歴代名醫傳略・法眼意安恂撰・門人梅壽宗和刊行。柱題=傳畧。構成=姜沆序(十七字十一行／半丁)二丁半・又玄子序(十七字十一行／半丁)一丁・上巻目録三丁・上巻本文六十六丁・下巻目録三丁・下巻本文八十丁。各目録と本文は十八字十一行／半丁。匡郭上下左右双边。行間罫線なし。序題と目録題は一字台頭。各年代は陰刻(白抜き)二字下げ。各人名は三字下げ、○印付き。出典表示は梓つき。訓点(返り点、豎点、句点、片仮名添え仮名)つき。Dと同版。卷末刊記のみ異なる。縦二十八・五センチ横十八・八センチ。

以上を整理し、書誌事項の特徴だけを述べれば次のようになる。

A 無刊記古活字本の本文は、半丁あたりの行数が十行で、他本の十一行より一行少なく、全体の丁数が多くなっている。漢籍のように行毎に罫線がある。

B 元和三年古活字本は、A以外の三本の、序文は十七字十一行／半丁、本文は十八字十一行／半丁のスタイルの嚆矢となった。各人名に○印をつけたのも初めて。

C 寛永三年古活字本は、卷末刊記に「梅壽重刊」と初めて版元を明らかにしている。各人名の上部に出典を示す頭書(頭注)がある。

D 寛永九年整版本は、内題下に「門人 梅壽・宗和(割注) 刊行」、卷末刊記に版元として田原仁左衛門の名がある。上古から明にいたる各年代は陰刻(白抜き)。頭書(頭注)

の出典表示に枠がついている。訓点つき整版本だが、漢字は活字本のように十八字十一行／半丁が整然と配置されている。

E 寛永十年整版本は、巻末刊記の年記が「寛永十年十一月吉旦」とあり、Dの「寛永九壬申応鐘良辰」と年記のみが異なる同版本。

二つの序文、上下巻の目録、本文に関して、DとEは同版なので、ここではA B C Dの四本に絞り、漢字の字形・字体・字種の異同を検討する。

各人名には、「上古の伏羲」「明の龔廷賢」のように目録に記載されている年代をつけて表記した。目録の「三国」は「三国時代」とした。漢文訓読にあたっては、旧字、異体字等は現代の通用字に改め、読み仮名、送り仮名は現代の仮名遣いを採用した。和漢の古典籍の書名には、煩雑さを避けるため、『 』を省いた。

二、古活字の字形

はじめに、古活字版のA B Cにあらわれる活字字形の違いを示す。

各漢字の実寸は七～十一ミリ四方。同時代の「かな活字本」には往々にして「二字活字」がみられるが、A B Cから二字活字の痕跡は発見できなかった。

杏雨書屋所蔵のA無刊記本とB元和三年本の活字画像は、紙焼き写真を600DPIカラーでスキャンし、PDF形式でパソコンに取り込んだ。国会図書館所蔵のC寛永三年本は、PDF形式で公開されており、そのままスナップショットで取り込んだ。これらの画像をアドビ社のPhotoshopおよびマイクロソフト社のWindows10付属のペイントとペイント3Dを使用して、不要な後筆の返り点、堅点、朱引きを消去した。最終的にBMP形式で色調をグレースケールに統一して保存した。

【表1】巻頭の高活字

		A 無刊記	B 元和三	C 寛永三
姜沆序 第一丁表	神農氏	神農氏	神農氏	神農氏
	①	草	草	草
	②	草	草	草
	③	草	草	草

このような画像処理や画像認識は、本来、A B Cのすべての丁（ページ）のすべての活字に対して、A I（人工知能）等を利用しておこなうべきものだが、コンピュータを活用した各本約五万字の全数調査と解析は他日を期すことにする。

ここでは、将来の解析の筋道を示す道標とするため、手作業と目視でおこなった画像分析のプロセスと結果を示す。

(1) 同じ位置の活字

【表1】にA B Cの巻頭にある姜沆序第一丁表の「神農氏」と三箇所の「草」の活字画像を示す。以下の表では、表内の画像すべてを同一縮尺で表示している。

この表では、神の示偏の「ネ」の上部がAは「一」、Bは「丶」、Cは「丨」になっているほか、農の「辰」がA B Cで異なっている。

「草」の草冠は、A①②が旧字体の「艹」、A③が現行の通用字の「艹」になっている。

Bでは、③が旧字体の草冠であるのは明らかなが、B①はどちらとも判定しがたい。B②は現行の草冠に見える。

C①②は現行の草冠、C③は旧字体のように見える。Cは草の下部の「十」の縦棒が短いのが特徴になっている。

A B Cの三本とも①②③の字形が異なり、三本それぞれで異なる複数の字母(活字の原稿)を使用していることがわかる。

(2) 離れた丁の活字

【表2】古活字の「祠」

	A 無刊記	B 元和三	C 寛永三
三国・負局先生①	祠	祠	祠
宋・掌禹錫 ②	祠	祠	祠
宋・何澄 ③	祠	祠	祠
明・陳立興 ④	祠	祠	祠

【表2】は、互いに異なった丁の、三国時代の負局先生、宋の掌禹錫、宋の何澄、明の陳立興にあらわれる「祠」の活字画像である。A Cはネ偏、Bは示偏となっており、Bの字母を作った人の「書き癖」を示している。ただし、A Cで同じ活字を共用した痕跡は【表2】からはうかがえない。

Aの②と④は同じ活字であろう。Bの①と④、②と③は同じ活字のようである。Cの②③④は同じようだが、④はやや大きい活字のように見える。

いずれにせよ、A B Cの三本で互いに異なった活字セットを使用している、と結論できる。

(3) A無刊記本の連続丁の活字形

次に、連続した丁にあらわれる同一漢字の活字字形を調べ、二丁の活字を同時に組む、いわゆる二丁組版の可能性を検討する。

【表3】A無刊記本 一丁～五丁の「神」と「醫」

一丁	表	① 神	②① 醫
	裏	② 神	②② 醫
二丁	表	③ 神 ④ 神 ⑤ 神 ⑥ 神 ⑦ 神	②③ 醫
	裏	⑧ 神 ⑨ 神	②④ 醫
三丁	表	⑩ 神 ⑪ 神 ⑫ 神	—
	裏	⑬ 神 ⑭ 神 ⑮ 神	—
四丁	表	⑯ 神 ⑰ 神	—
	裏	⑱ 神	—
五丁		—	②⑤ 醫
		⑲ 神 ⑳ 神	②⑥ 醫 ②⑦ 醫 ②⑧ 醫

A B Cの本文の第一丁から第五丁にいたる、上古の伏羲、神農、黄帝、僦貸季、岐伯、鬼臾區には、神農(七例)、神丹(三例)、神明(二例)のほか、神而、神靈、百神、神仙、萬神、

神之圖、神策、神曆（各一例）と、「神」活字が二十回使用されている。また、同じ本文第一丁から第五丁には、名醫圖（三例）、醫也（二例、Aは第六丁に出現）のほか、名醫傳略（Aは名醫傳畧）、醫道、醫之端、大醫、醫疾（各一例）と、「醫」活字が十回（Aは八回）使用されている。

〔表3〕（前頁）に、A無刊記本の一丁～五丁の「神」と「醫」を示す。

「神」の活字は、字形の類似から次のように八類に分類できる。

A神Ⅰ 一丁①二丁⑤三丁⑮

A神Ⅱ 一丁②二丁④三丁⑭

A神Ⅲ 二丁③三丁⑪五丁⑲

A神Ⅳ 二丁⑥四丁⑰

A神Ⅴ 二丁⑦三丁⑬

A神Ⅵ 二丁⑧三丁⑫四丁⑱

A神Ⅶ 二丁⑨四丁⑯

A神Ⅷ 二丁⑩五丁⑳

この分類から、二つの仮説を導くことができる。一つは、ⅠⅡⅢⅥに見られるように「原則として同じ活字は三回使いまわす」、二つ目は「一丁ごとに活字を組んで、印刷している」という仮説である。とくに二つ目の仮説は、二つの丁の活字を同時に組む、いわゆる二丁組版を否定するものである。ただし、字形が類似しているからと言って、単に同一の字母を使用しているだけかもしれないので、この二つの仮説は、あくまでも仮説として提示しておく。

「醫」の活字は、二類が取り出せる。

A醫Ⅰ 一丁㉑二丁㉓五丁㉖

A醫Ⅱ 一丁㉒二丁㉔五丁㉕

この分類によっても、一丁と二丁（および五丁）の活字を別々に組んだと考えられる。

〔表4〕 B元和三年本 一丁～五丁の「神」と「醫」

一丁	表	① 神	㉑ 醫
	裏	② 神 ③ 神 ④ 神	㉒ 醫
二丁	表	⑤ 神 ⑥ 神 ⑦ 神 ⑧ 神	㉓ 醫 ㉔ 醫
	裏	⑨ 神 ⑩ 神 ⑪ 神 ⑫ 神	—
三丁	表	⑬ 神 ⑭ 神 ⑮ 神	—
	裏	—	㉕ 醫
四丁	表	⑯ 神 ⑰ 神 ⑱ 神	㉖ 醫 ㉗ 醫
	裏	—	㉘ 醫
五丁	表	⑲ 神 ⑳ 神	—
	裏	—	㉙ 醫 ㉚ 醫

(4) B元和三年本の連続丁の活字形

〔表4〕にB元和三年本の一丁～五丁の「神」と「醫」を示す。BはAより半丁あたりの行数が一行多いため、「醫」は十回あらわれている。

Bの「神」には、Aの①⑥⑩⑰⑲のように示偏の上部が「文」のように見える活字はなく、示偏は「ネ」を用いている。「ネ」の最上部の第一画はそれぞれ微妙に異なっている。

類似した活字から四類に分類できそうだが、明確ではない。

B 神Ⅰ 一丁①三丁⑮

B 神Ⅱ 一丁③二丁⑫五丁⑳

B 神Ⅲ 一丁④五丁⑲

B 神Ⅳ 二丁⑥四丁⑱

Bの「醫」は、連続していない丁に、類似した活字があらわれている。

B 醫Ⅰ 一丁㉑四丁㉖

B 醫Ⅱ 一丁㉒三丁㉕五丁㉙

特に㉒㉕㉙は一丁おきにあらわれており、Bの印刷が二丁組版によっておこなわれた可能性を示唆している。

(5) C 寛永三年本の連続丁の活字形

C 寛永三年本は、Bと同じ半丁あたり十八字十一行であり、本文の「神」「醫」はBと同じ丁の同じ位置に存在する。

〔表5〕にCの「神」「醫」を示す。

〔表5〕 C 寛永三年本 一丁～五丁の「神」と「醫」

一丁	表	① 神	㉑ 醫
	裏	② 神 ③ 神 ④ 神	㉒ 醫
二丁	表	⑤ 神 ⑥ 神 ⑦ 神 ⑧ 神	㉓ 醫 ㉔ 醫
	裏	⑨ 神 ⑩ 神 ⑪ 神 ⑫ 神	—
三丁	表	⑬ 神 ⑭ 神 ⑮ 神	—
	裏	—	㉕ 醫
四丁	表	⑯ 神 ⑰ 神 ⑱ 神	㉖ 醫 ㉗ 醫
	裏	—	㉘ 醫
五丁	表	⑲ 神 ⑳ 神	—
	裏	—	㉙ 醫 ㉚ 醫

Cは、A Bと比べて活字のサイズがひとまわり小さくなり、それぞれの漢字の輪郭は鮮明で、字形は統一され、A Bと比べて格段に印刷技術が進歩している。Aの「神」の①⑥⑩⑰⑳のように、Cの③⑨⑪⑳は、示偏の上部が「文」に見える。

C 神Ⅰ 一丁①二丁⑥四丁⑱

C 神Ⅱ 一丁④二丁⑤三丁⑭五丁㉑

この二類が摘出できそうだが、Cの「神」はB以上に明確な分類が困難である。

Cの「醫」は、三類に分類できる。

C 醫Ⅰ 一丁㉑五丁㉙

C 醫Ⅱ 一丁㉒二丁㉔四丁㉗

C 醫Ⅲ 四丁㉘五丁㉚

残りの二丁㉓、三丁㉕、四丁㉖の三つは孤立しているように見える。

「神」と「醫」の分類から、CはAと同様、二丁組版の可能性は低いと推測できる。

三、異体字の使い分け

ここからは古活字本のA B Cに、整版本のD寛永九年本を加えた、四本の漢字字体を検討対象とする。目的はA B C D四本の相互の関係を明らかにすることにある。

A B C Dに使用されている漢字は、原則として旧字体（いわゆる康熙字典体）である。爲（為）、數（数）、溪（溪）などのほか、医学に関する基本的な漢字の、醫（医）、經（経）、脉（脈）、氣（気）、滯（滞）などは、括弧内の新字体（現代の通用字の字体）をいっさい用いていない。（[付表α 異体字の使い分け] I類を参照）

(1) 包摂字体のルール

〔二、古活字の字形〕で見たように、同じ旧字体の漢字でも字形は無数に存在する。このような古典籍の原文をパソコンに入力し、検索や字数（頻度）のカウントに利用するためには、異なった字形を一定の字体に包摂するルールを設ける必要がある。

具体的には、ウインドウズ・パソコンで使用できる三つの漢字表、C J K統合漢字（約二万一千字）、C J K統合漢字拡張A漢字（約六千六百字）、C J K統合漢字拡張B漢字（約四万二千七百字）のユニコードの表に挙げられている約七万字を用い、次の方針にもとづいて異なる字体を包摂し、A B C D四本の原文、約五万字×四本＝約二十万字をパソコンに入力した。

○ 区別が難しい漢字

象と象【象】、但と但【但】、『具』と具【具】、器と器と器【器】、呂と呂【呂】、尢と尢と尢【尢】、黄と黄【黄】など、判別が困難な漢字は【 】内の通用字に書き換えて入力した。

○ おおむね区別できる漢字

覧と覽、相と栢、歳と歳と歳、嘗と嘗と嘗、己と巳と巳、傳と傳、助と助、豊と豊、郷・郷・郷・郷・郷・郷・郷・郷・郷（九通り！）などはいちおう区別した。漢字の誤記、転用が想定されるほか、それぞれの原文の字体とユニコードの漢字字体とは微妙な違いがあり、字数（頻度）のカウントはおこなっていない。

○ 三つの漢字表にない漢字

𠂔を偏とし、𠂔を旁とする漢字『𠂔』は、A B C D四本で一貫して使われているが、拡張B漢字にも含まれていない。ここでは、【將】で代用した。

同じく四本で一貫して使われている、鬼の上部の𠂔がない漢字『𠂔』は、【鬼】とした。同様に、更の上部の一を省いたような漢字『𠂔』も、【𠂔】で置き換えた。

ネを偏とし、司を旁とする漢字『𠂔』も[表2]で見たように、BをのぞくA C D三本で使われているが、【祠】で代用した。ネを偏とする【祀】【禮】も同様に示偏で代用した。

偏が既と同じで、旁が即と同じ𠂔になっている漢字『𠂔』は、【即】とし、即との使い分けを調べた。なお、以上の『 』内の漢字は、C J K統合漢字、C J K統合漢字拡張A漢字、C J K統合漢字拡張B漢字に含まれない外字である。ここでは市販の漢字ソフト「今昔文字鏡・単漢字十六万字版」の画像を使用している。

このほか、上部の十がヒになっているものは【真】【慎】などに統合した。すなわち【真】と翻刻している漢字には、上部がヒになっているものと、上部が十になっているものの両方が原文にはある。同様に草冠が「艹」となっている字体は、三つの漢字表にないため、通用字の【草】などを包摂字体とした。

勸、觀などの偏の上部を簡略化した（艹と𠂔の部分の上部が共の上部のようにになっている）異体字は勸、觀と区別するため、現行の【勸】、【觀】などに置き換えた。

三つの漢字表の包摂字体には、【祠】【草】のように旧字体、新字体が混在している。示偏については、「示」を用いた「祠」（B四例）や「祥」（C五例、D四例）、「視」（A六十一例、B六例）などを例外として、A B C D四本ともほぼ「ネ偏」を用いている。このうち【祿】はC J K統合漢字にあるが、『禮』『祇』は三つの漢字表に含まれない。現在の日本語仕様のウィンドウズ・パソコンでは三つの漢字表のユニコードを利用し、『禮』『祇』を【禮】【祇】として入力するほかない。

(2) 異体字の用例数

〔付表α 異体字の使い分け〕は、三つの漢字表に含まれる薬：藥、究：究、面：面など、主な異体字を使い分けた用例数をA B C Dの四本ごとに示している。ここで言う異体字とは、「字義（漢字の意味）・字音（漢字の読み方）が等しい一方で、互いに異なる字体をもつ複数の漢字」である。なお、各本の用例数は、誤字（誤用）、仮借（転用）などにより異なる場合がある。〔付表α〕の分類を下に示す。

○ I類 A B C D 二十二例

A B C Dの四本で一貫して使用されている主な旧字体を示している。たとえばI類の最初の医：醫は、新字体の「医」の用例数はA B C D四本で0、旧字体の「醫」の用例数はAで684、B C Dで686であることを示している。A以外の三本には「名醫傳略（Bは畧）卷之上目録終」「名醫傳略（Bは畧）卷之下目録終（C Dは終なし）」の文言があり、「醫」の用例数が2個多くなっている。

○ II類 A B C D* 二例

四本とも同じ位置で異体字が使い分けられているケース。最初の「答」は四本とも、上古の伯高・少兪・少師（三人の伝記をまとめて記した条）、唐の孫思邈、五代の呉延紹、宋の陳昭遇、錢乙の五箇所て用いられ、「荅」は四本とも、西晋の皇甫謐、南北朝の劉涓子、徐熙、褚澄、徐嗣伯、唐の孫思邈、李洞玄、許嗣宗の八箇所て用いられている。唐の孫思邈には、「答」と「荅」の両方の用例がある。

○ III類 A/B C D 九例

それぞれの異体字の用例数がAとB C Dで異なるケース。たとえば、Aでは「藥」の用例数が55、「藥」の用例数が264と、新字体と旧字体が使い分けられているが、B C Dでは新字体の用例がまったくないことを示している。

○ IV類 A/B C D* 二例

青：青、宜：宜の二例は、使い分けがIII類に準じ、Bの用例数がC Dとは若干異なってい

る。

○ V類 AB／CD 十七例

即：卽、繼：繼、群：羣などは、使い分けがABとCDで二分されている。

○ VI類 AB／CD＊ 十三例

V類に準じるケース。微：微のようにABの用例数はまったく同じで、CDの用例数がほぼ同じになっている。晋：晉：晋はABの用例数がほぼ同じで、CDの用例数がまったく同じになっている。

○ VII類 A／B／CD 十例

世：卅、視：視、間：間などは、A・B・CDの三つの用例パターンに分かれている。

○ VIII類 B／ACD 八例

庶：庶、準：準など、それぞれの異体字の用例数がBとACDで異なるケース。

○ IX類 AB／C／D 一例

隆：隆は、AB・C・Dの三つのパターンに分かれている。

○ X類 A／B／C／D 一例

「謹謹」を「謹々」のように記す繰り返し記号「々」の使用度数は四本で異なっている。

(3) まとめ

[付表α 異体字の使い分け]からは、次のような結論が導かれる。

醫・經・脉・氣など医学に関する漢字および爲・數などの漢字は、I類に挙げたようにABCDに共通する字体が一貫して採用されており、表記のゆれはない。江戸初期において、これらの漢字字体は一般的に使用されていた。

使い分けが一致するII類はむろんのこと、III類では藥：藥、究：究、面：面のような新旧字体が混在するAに対し、BCDは新旧どちらかの字体に統一する傾向がある。

各本が先行する刊本の表記を参考に行っていることは言うまでもない。V類のAB／CDのパターンからABはCDに先行すると見られ、III類のA／BCDのパターンからA無刊記本はB元和三年本に先行すると結論できる。

IV類の微：微、腸：腸、祥：祥、塗：塗の四例およびIX類の隆：隆の一例を除き、その他の異体字の使い分けは、CとDで一致している。DはCを見ながら、おおむね忠実に版下を起こしたためであろう。すなわち、D寛永九年本はC寛永三年本を複製した、いわゆる複本と判断できる。なお、IV類の四例とIX類の一例のほか、[二、古活字の字形]で見たように、CとDの字形は、類似した漢字は一部あるものの、基本的に一致しないので、DをCの刊本を版下に再利用した「後刷り」と見ることはできない。

四、字種の異同

[付表β 字種の異同 上巻]と[付表γ 字種の異同 下巻]は、題名(外題、内題、目録題、序題、柱題)と刊記(内題の刊記、巻末刊記)を除く、序文、目録の各人名、本文で使われている漢字の異同をまとめている。本文の闕字(けつじ。欠けている漢字、脱字)、衍

字（えんじ。余分に多い漢字）は、D寛永九年整版本を基準にした。

褰と褰、尔と爾などは、異体字と見なせるが、ここでは別字として扱い、リストに含めている。

(1) 異同パターンの集計

〔表6〕は、〔付表β〕と〔付表γ〕の、A B C D四本の上下巻に見える字種の異同パターン数を集計している。

大半は、字体のよく似た漢字の誤記と、その訂正である。「𪛗」「𪛘」のような難漢字を「或」「敵」のように書き換えたものもある。

〔表6〕字種の異同 上下巻の集計

異同パターン	上巻	下巻	合計
A/BCD	16	36	52
AB/CD	27	23	50
B/ACD	10	5	15
C/ABD	12	1	13
D/ABC	1	3	4
A/D/BC	1	0	1
AD/BC	0	1	1
A 闕字 1 字	1	2	3
A 闕字 3 字	0	1	1
A 衍字 1 字	1	0	1
計	69	71	140

異同の過半をしめるA／B C DとA B／C Dの例を示す。

A／B C DすなわちAでの表記がB C Dで訂正された例は、上巻では無改→無攻（周の醫和）、傷動→復動（三国時代の華佗）、下巻では此征→北征（宋の劉翰）、常勲→常熟（明の王時勉）などがある。

A B／C DすなわちA Bでの表記がC Dで訂正された例は、上巻では常山→常出（西漢の玄俗）、唯中→喉中（五代の呉延紹）、下巻では錫汝→賜汝（宋の許叔微）、解感論→解惑論（宋の錢俸）などがあげられる。

A B／C Dの例では、わずかではあるが、生姜→生薑（宋の楊介）、少兒→小兒（明の倪維德）の

ように書き換え字を適用したものもある。なお、薬学では生姜と生薑を区別するが、歴代名医伝略の諸版においては同義に用いている。

この他、B、C、Dがそれぞれ孤立したB／A C D、C／A B D、D／A B Cについても、其失→其夫（明の黄師文）のように字形のよく似た漢字どうしの訂正がほとんどといえるだろう。

(2) 闕字と衍字

Dの本文に対する闕字と衍字は、Aの本文だけにあらわれる。Aの闕字と衍字はB Cでは訂正されており、B CにはDと漢字の多寡はない。

Aの上巻の闕字一字は、周の秦越人の「形羸不能口藥五不治也（形みち、薬を服すること能わざる、五の不治なり）」で、不能と薬の間に動詞がなければならない。史記（卷一〇五扁鵲倉公列伝四五扁鵲）の「病に六不治あり」の条から、この闕字が「服」であることがわかる。

Aの下巻の二箇所にある闕字のひとつは、宋の許希の「帝爲築廟于城西口靈應侯（帝、為に廟を城西に築き、靈應侯に封ず）」で、ここでは靈應侯を目的語とする動詞が欠けている。

宋史（巻四六二列伝二二一方法下）に許希の伝があり、闕字が「封」であることがわかる。

Aの下巻にある、もうひとつの闕字は、元の戴起宗の「至元元年註疏悟真□以作序（至元元年悟真篇）を注疏し、もって序を作る）で、四庫全書（子部三六七道家類）に悟真篇注疏が収められているので、「篇」が欠けていることがわかる。

Aの下巻の三字の闕字は、宋の太宗皇帝の「更就枕無不氣凝滯諸疾自生欲求（BCDは永）清爽其□老子云我命在我（更に枕に就けば、氣、凝滯し、諸疾、自ら生ぜざるということなし。清爽を求めん（BCDは永らえる）ことを欲せば、それ可得乎（うべけんや）。老子のいわく、我が命は我に在り」である。欲求清爽の欲を「ほつす」と終止形で読むと前文とのつながりが不自然となるため、「ほつせば」と仮定（条件）形に読むことになる。すると、其を発語「それ」または指示語「その」と読んでも、「老子のいわく、我が命は我に在り」とのつながりがなくなる。すなわち其の後に欠落があると推定できる。宋の張杲の医説（巻九無輕撰養）には、「欲求清爽其可得乎」とAの求（BCDは永）を含んだ文がある。

四箇所（四箇所）の闕字は、いずれも文法や文脈から□部分が欠落していると判断でき、典拠を参照すれば闕字を埋めることができる。このような闕字が印刷のどの段階で生じたかは定かではない。宗恂が書いた原稿段階で欠落していたとも考えられる。四箇所ともいわば単純ミスであり、故意に欠落させたとは考えにくい。

四本のなかに一例しかないAの衍字については、[五、地円説の伝来]で述べる。

(2) まとめ

Aの誤記がBCDで、ABの誤記がCDで訂正されている、という事実から、A無刊記活字本が四本のうちもっとも古いかたちをとどめていることは明らかである。Aは、姜沆序の年記「戊戌臘月日」つまり、慶長三年(1598)十二月から、Bの卷末刊記「元和丁巳姑洗上弦日」つまり、元和三年(1617)三月までのあいだに刊行されたと推定できる。

[三、異体字の使い分け]で述べた、D寛永九年整版本はC寛永三年活字本をベースにして整版された、いわゆる複本であることが、CDの親近性が高いA/BCD、AB/CD、B/ACDの字種の異同パターン数が多数を占めることから主張できる。

Cの卷末刊記「寛永第三歳舍丙寅季春良日梅壽重刊」の、梅壽なる人物が最初に刊行したのはBである可能性が高い。なぜなら、字種の異同パターンのうち、Bとは親近性がなく、AとCDの親近性を示すB/ACDは上下巻合計十五例に過ぎず、対して、Aとは親近性がなく、BとCDの親近性を示すA/BCDは五十二例を数えるからである。A/D/BC、AD/BCも各一例ある。またBは、CDと同じく、半丁あたり序文十七字十一行、本文十八字十一行の版形を採用している。以上から、梅壽が刊行した初版はBと考えられる。

なお、Dの内題には「法眼意安恂撰・門人梅壽宗和刊行」と、梅壽と宗和が割注で記されており、梅壽、宗和の二人が宗恂の門人であることがわかる。この他、姜沆序に「弟子理安」の記述があり、宗恂の三人の弟子の名前が歴代名医伝略には記されている。

五、地円説の伝来

A無刊記本の衍字一字は、唐の孫思邈（そんしぱく）の条にある。千金方（三十卷）を著した医学者、薬学者であり、道士でもある孫思邈は、弟子盧照鄰の質問に答えて、天地の疾病とは何かを述べたあと、人事すなわち人間社会の疾病を論じている。

照鄰曰、人事奈何。曰、①心爲之君、君尚恭、故欲小。詩曰、如臨深淵、如履薄冰。小之謂也。②膽爲之將、以果決爲務、故欲大。詩曰、赳赳武夫、公侯干城。大之謂也。③

仁（BCDは行）者静、地之象、故欲方。傳曰、不爲利回、不爲義疚。方之謂也。④智者動、天_地（BCDは天のみ）之象、故欲圓。易曰、見機而作、不俟終日。圓之謂也。

この一節は、「地」の字以外は、新唐書（卷一九六列伝一二一隱逸）の文章をそのまま引き写したものである。

ここには次のような二重の対句構造がある。

照隣が曰く、人事いかん。（孫思邈）曰く、

第一の対句

- ① 心、之を君と爲し、君は恭を尚（とうと）ぶ。故に小なることを欲す。詩（詩經小雅）に曰く、「深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如く」と。小の謂なり。
- ② 胆、之を將と爲す。果決（決断）を以て務（つとめ）と爲す。故に大なることを欲す。詩（詩經国風周南）に曰く、「赳赳（強靱）たる武夫、公侯の干城（軍人）」と。大の謂なり。

第二の対句

- ③ 仁は静なり。地の象、故に方なることを欲す。伝（春秋左氏伝昭公三十一年）に曰く、「利回（利益追求）を爲さず、義疚（不義理）を爲さず」と。方の謂なり。
- ④ 智は動ず。天_地の象、故に円なることを欲す。易（易經繫辭下伝）に曰く、「機を見て作す。終日を俟たず」と。円の謂なり。

第一の対句では、①心＝君＝尚恭＝小に対し、②胆＝將＝果決＝大が対応している。

第二の対句において、③が仁＝静＝地＝方、④が智＝動＝天_地＝円となっていることを見比べれば、「天地」は「天」の誤りで、「地」が余分であることは明らかである。孫思邈は、周髀算經以来の、天は円く、地は方（正方形）とする天円地方説にもとづき、弟子の質問に答えた。

旧唐書（卷一九一列伝一四一方伎孫思邈）では、この孫思邈条の一節は、

又曰、⑤膽欲大而心欲小、⑥智欲圓而行欲方、⑦詩曰、如臨深淵、如履薄冰。小心也。

⑧赳赳武夫、公侯干城。謂大膽也。⑨不爲利回、不爲義疚。行之方也。⑩見機而作、不俟終日。智之圓也。

となっている。

ここでは、第一の対句として、⑤の胆＝大、心＝小の対比があり、⑦の詩經の小心、⑧の詩經の大胆が対応している。第二の対句では、⑥の智＝円、行＝方の対比があり、⑨の左伝の行＝方、⑩の易經の智＝円の対句が対応している。

新唐書の④智＝動＝天＝円を縮約すると、旧唐書の⑩智＝円になる。新唐書の③ $\square$ ＝静＝地＝方を縮約した $\square$ ＝方は、旧唐書では⑨ $\square$ ＝方となっている。すなわち、旧唐書の孫思邈条に依拠して、Aの「 $\square$ 者静」はBCDでは「 $\square$ 者静」に改変されたと考えられる。

旧唐書の⑤⑥の「胆は大なることを欲し、而して心は小なることを欲す。智（知ること）は円（円満）なることを欲し、而して行（おこない）は方（厳格）なることを欲す」の文言は人口に膾炙し、記纂淵海（巻五七）、集事淵海（巻三四）、太平広記（巻二一八）、冊府元龜（巻八三六）などの類書（百科事典）に引用されている。

【一、諸版の書誌事項】で報告したように、CDの孫思邈条の上部には、出典を示す頭書（頭注）として、「十七史」「唐書」「洵海」「続列仙伝」の四つの書名が示されている。「十七史」には新唐書が含まれ、旧唐書は含まれない。「唐書」は新唐書、旧唐書の双方の可能性があるが、新唐書を含む「十七史」が先に挙がっている以上、旧唐書を指すのであろう。「洵海」が記纂淵海、集事淵海のどちらであっても、右に示したように、旧唐書の文言の引用がある。つまり、CDの頭書の「十七史」「唐書」「洵海」は、新唐書と旧唐書の両書が出典であることを示している。

朱熹と呂祖謙が編んだ朱子学の入門書、近思録（巻二）には、漢の儒学者、董仲舒と並んで、孫思邈の文言が示され、「（どちらも）もって法（原則）と為すべし」としている。

王陽明は、朱子学の智＝円を上位とし、行＝方を次位とする「先知（智）後行説」を批判し、「知はこれ行の始めにして、行はこれ知の成なり」（伝習録昨聞）と、「知行合一」を唱えた。

BCDの校正者が新唐書の「仁」を旧唐書の「行」に置き換えた背景には、このような朱子学や陽明学の思想があるのだろうか。あるいは、次項に詳説するA無刊記本の衍字「地」に関係があるのだろうか。BCDの改変の真意は不明である。

なお、CDのいま一つの頭書、「続列仙伝」は、孫思邈条の文中にある龍宮伝説（わが国の浦島伝説）の出典が、唐の沈汾撰の続仙伝（中巻）であることを示している。明の万暦年間刊行の列仙全伝（巻五）にも孫思邈が龍宮をおとずれた逸話が記されている。

(1) 衍字「地」とキリシタン

Aにあらわれた衍字「地」は、以下に述べる理由から、Aでは意図的に書き加えられ、BCDでは意図的に削除されたと考えられる。

第一の理由は、おそらく慎重のうえに慎重に校正したであろう歴代名医伝略の、一本約五万字、四本合計約二十万字のうち、衍字は、このA無刊記本の「地」だけだからである。

第二に、【附表β】と【附表γ】にみられるように、上下巻の字種の異同のほとんどは鳥と鳥、佗と他、或と或、光と先、司と可など、字形のよく似た漢字どうしの書き換えであり、天と地の象（かたち・かたどり）がどちらも円（まる・まどか）である、とする「天円地円説」とも言うべき意味を持った異同は、このA無刊記本の衍字しかない。

新唐書の「智者動、天之象、故欲圓」に、意図的に「地」が付け加えられたと考える最大の理由は、林羅山著の「排耶蘇」に記された耶蘇者の発言である。

慶長十一年(1606)六月十五日、林羅山は、イエズス会の日本人修道士、不干斎ハビアンの

もと（京都の教会堂であろう）を訪ね、天地のかたちを論争した（羅山林先生文集排耶蘇）。議論は「円模の地図」を傍らにして行われた。羅山は、朱子の論語或問（為政）を引き、「彼（ハビアン）、地中を以て下となし、地形を円なりとなす。その惑い、あに悲しからずや。朱子のいわゆる天半地下をめぐる。彼これを知らず」と述べる。かたや耶蘇者すなわちハビアンは、次のように主張したと羅山は伝える。「耶蘇者曰く、天は円なり、地もまた円なり」。「天地之象、故欲圓」はまさしくこの耶蘇者の発言と一致している。

フランシスコ・ザビエルは、一五五二年一月十九日、インド南部のコーチンから書簡を発した。

（日本人たちは）好奇心が強く、うるさく質問し、知識欲が旺盛で、質問は限りがありません。また彼らの質問に私たちが答えたことを彼らは互いに質問しあったり、話したりしあって尽きることがありません。彼らは地球が円いことを知りませんでしたし、太陽の軌道についても知りませんでした。彼らはこれらのことやその他、例えば流星、稲妻、降雨や雪、そのほかこれに類したことについて質問しました。それらの質問に私たちが答え、よく説明しましたところ、たいへん満足して喜び、私たちが学識のある者だと思ったようです。そのことは私たちの話を信じるために少しは役立っています。（河野純徳訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』第96-21。傍点筆者）

ザビエルは、キリスト教が伝来するまで、日本人は地球が円いことを知らず、宣教師に教えられてはじめて地球が円いことを知った、と述べている。すなわち、不干斎ハビアンの「天は円なり、地もまた円なり」および、Aの「天地之象、故欲圓」は、宣教師から得た知識にもとづいていると考えられる。Aの衍字「地」は、著者吉田宗恂が当時、キリシタンに近い位置にいたと推定できる根拠のひとつとなっている。

宣教師ルイス・フロイスの一五八五年八月の書簡によれば、曲直瀬道三（初代道三）は、キリシタンに入信し、洗礼名をベルショールとつけられた（村上直次郎訳注『イエズス会日本年報・下』）。初代道三は、弟子、孫弟子を輩出した当代医学の祖師とも言うべき医師、医学者である。宗恂は著書のなかで「日本天正十年（1582）、一溪老師はじめてこれ（重刊証類本草の序）を講ず」（本草序例抄卷一時代）と初代道三に敬意をあらわしている。

曲直瀬道三玄朔（二代目道三。号は東井）を著書の医方大成論抄（巻一巻二の十四箇所）では「東井先生」「東井翁」とよび、宗恂と二代目道三との親密な交際がうかがえる。宗恂の最期は、大坂から駆けつけた二代目道三が看とっている（時慶卿記三二）。

羅山とハビアンの論争から六年、慶長十七年（1612）三月、幕府は、京都の教会堂を破壊した。翌慶長十八年（1613）禁教令を全国に拡大した。以後、キリシタンへの弾圧は苛烈を極め、多くの宣教師や信者が処刑された。

B元和三年（1617）本、C寛永三年（1626）本、D寛永九年（1632）本の三本は禁教後に出版されている。

A無刊記本は、おそらく「地もまた円なり」を信奉するキリシタン信仰が許されていた慶長の弛教期に出版されたのであろう。禁教後に「地もまた円なり」と敷衍することは、文字通り生命を賭す行為であったであろう。ここに、B C Dから意図的に「地」が取り除かれた

と推定できる所以がある。

(2) 江戸初期和算家とスピノラ仮説

宗恂は、父の医業と意安（意庵）の名を受け継ぎ、次男でありながら吉田角倉家の惣領となった。その一族のなかに、塵劫記を著した数学者、吉田光由（1598—1672）がいる。

『関孝和』『東西数学物語』などの著書をもつ平山諦は、宮崎賢太郎訳著の「カルロ・スピノラの都・長崎よりの三書簡」（1984年純心女子短大紀要二一）および『カルロ・スピノラ伝』（1985年）にもとづき、「スピノラは京都の天主堂（教会堂）で日本人に数学を教えた」とする「スピノラ仮説」を発表した。

イタリアの宣教師スピノラが慶長九年（1604）初めて京都の天主堂に来り、説教の傍ら数学の講義を始めた時は、光由は七歳の幼児であった。光由の外祖父・吉田（角倉）素庵は三十四歳であった。恐らく、スピノラが慶長十六年（1611）に京都を去る二、三年前から光由は素庵に連れられて、天主堂に参ったのであろう。（平山諦『和算の誕生』1993年）スピノラは、ローマで数学者、天文学者のクラヴィウスに師事し、ミラノでは数学を教えている（『カルロ・スピノラ伝』）。

スピノラ仮説は、塵劫記に見える開平・開立の計算法が西洋の近似法に一致するなど、多くの数学的な根拠によって補強された。国東半島の僻村に、光由のものと伝えられる無銘墓や位牌が存在する事実も補強の材料となった。寛永八年（1631）版塵劫記の跋文には、「我（光由）、稀に或師につきて、汝思の書（程大位の算法統宗）を受け、是を服飾とし領袖として、其一二を得たり」とある。平山諦は、光由に算法統宗を授けた、この或師こそ、イエズス会宣教師カルロ・スピノラである、と主張した。

或師に学んだとする江戸初期の和算家は吉田光由ばかりではない。

塵劫記と双璧をなす、漢文の数学公式集である豎亥録の著者、今村知商（1591—1668）は、その自序のなかで「（私は）方を為すことを知りて、いまだ円を為すことを知らず。いやしくも宇宙の洪荒、まさに度数あり。よりて小学をなすといえども、またこの術を明らかにせざるべからず。ここにおいて嘆をいだきて、歳月を経ること久し。而して或師に問う」と記している。この文章からは或師が「円」を理解していた、と考えざるをえない。

今村知商が著した日月会合算法（稿本）は、朱子学派の蔡沈による書経の注釈書、書集伝（堯典）の、「三歳一閏則三十二日九百四十分日之六百單一。五歳再閏則五十四日九百四十分日之三百七十五。十有九歳七閏、則氣朔分齊。是爲一章也」などに「算注」を加えたものである。

吉田宗恂も、自著の本草序例抄（巻三）に「三歳一閏なる則（ときん）ば三十二日九百四十分日之六百單一。五歳再閏なる則ば五十四日九百四十分日之三百七十五。十有九歳七閏なる則ば氣朔分齊、是を一章と為す也」と書集伝をそのまま引用している。

「三歳一閏」は三年ごとに一回（九年間に三回）閏月を置き、「五歳再閏」は五年ごとに二回（十年間に四回）閏月を置き、合わせて「十有九歳七閏」つまり十九年間に七回閏月をもうける、章法（メトン周期）の置閏法を意味している。

イエズス会のジョアン・ロドリゲスは、「(中国の暦法では) 太陽年は太陰年より十一日多いので、三年ごとに一つの閏年を置き、その年は一月を加えて一年を十三か月とし、さらに五年ごとに二つの閏年を置き、十九年の〔太陽の〕獣帯周行を経ると、十九年に七つの置閏を行なって、再び同じ状態にもどる」(池上岑夫・伊東俊太郎・佐野泰彦・長南実・土井忠生・濱口乃二雄・藪内清訳『日本教会史・下』第二卷第十五章。傍点筆者) と述べている。

今村知商、吉田宗恂に加え、ロドリゲスもまた、蔡沈の書集伝を読んだのであろう。

スピノラは、布教に活用すべき数学の本やノートを日本への航海途上で失っている(「カルロ・スピノラの都・長崎よりの三書簡」)。数学や暦学の指導にあたっては、やむなく中国の書物を利用したと考えられる。

仮説の上に仮説を重ねることは慎むべきであろうが、慶長の弛教期、京都の教会堂では、スピノラやロドリゲスらの宣教師とともに、吉田光由、今村知商らの江戸初期和算家、そして吉田宗恂は、算法統宗や書集伝を紐解き、討論を繰り広げたのではないだろうか。

(3) 吉田宗恂の思想

宗恂の人となりの特徴づけるのは、柔軟な思考と、和漢はもちろん南蛮をふくむ海外の豊富な知識である。

歴代名医伝略の慶長二年(1597)自序には、儒教と道教に対して、「それ性理を明(あから)むるは儒学にして、寿命をやすんずるは道教なり。これを兼ね有するは医ならくのみ。あに大道にあらずと謂わんや」とし、上古の黄帝、天師岐伯、周の老子をはじめ、三国時代の封衡、負局先生、董奉、東晋の葛洪、南北朝の陶弘景、唐の孫思邈、馬湘、李筌、杜光庭、宋の皇甫坦、元の戴起宗、薩守堅、明の陳立興に至るまで、各年代にわたり多くの仙人、神人、方士、道士の伝記を記している。さらに、「斑固、方技を叙して四種となす。医経、経方、神仙、房中これなり」と漢書(藝文志方技略)を紹介し、「房中はすなわち神仙の一術なり」と、ユーモアさえ感じさせる態度を自序のなかで示している。

儒学では、「鬼神を敬してこれを遠ざく、知と謂うべし」(論語雍也)、「怪力乱神を語らず」(論語述而)のように、神仙について語ることはない。

また、友人藤原惺窩の影響であろうか、仏僧では、東晋の仰道士、支法存、眼疾を治療して馬明龍樹とよばれた単道開、南北朝の僧深、宋の僧海淵、僧奉貞、僧智縁、元の僧繼洪が挙げられている。唐の李洞玄の条には、高宗が母の深恩にこたえるため、慈恩寺を建立したことが述べられている。慈恩寺の建立は、旧唐書(巻一九一列伝一四一方伎高宗)、資治通鑑(巻一九九唐紀一五太宗貞観二十二年)、わが国の曾我物語(巻七生滅婆羅門の事)にも見えるが、歴代名医伝略の李洞玄の条は、これらより詳しく記述している。

宗恂には、儒仏道の三教を包み込む、柔軟な精神があった。

父、吉田宗桂は、天龍寺の僧、策彦周良と二度の渡明を果たし、多くの漢籍を持ち帰った。

兄、角倉了以は、角倉船を仕立てて、安南(ベトナム)との交易を進めた。

慶長の役(丁酉再乱)で捕虜となった姜沆は、歴代名医伝略の序文で宗恂を絶賛した。

寛永諸家系図伝と寛政重修諸家譜には、宗恂が徳川家康につかえ、父宗桂が明から持ち帰

った光明朱を献上したほか、諸医がわからなかった南蛮渡来の瑠璃花を言い当て、さらに珊瑚枝の名称、産地などを明らかにして、恩賞を受けた逸話が記されている。

宗恂にとって、外国は手のとどく身近な場所であった。

宗恂は、フランシスコ・ザビエルが日本を去った六年後に呱呱の声を挙げ、京都の教会堂が破却される二年前に世を去った。その生涯は地球的規模では大航海時代に、わが国ではキリシタンの世紀に重なっている。

吉田宗恂は、万里の波濤を越えて伝来した知識を踏まえ、諧謔をこめて「智は動ず。天地の象、故に円なることを欲す」と記したのではないだろうか。「地」の衍字は、「知は進化する。今こそ旧来の天円地方説を棄て、地球は円い、と知るべきである」という信念の発露ではないだろうか。

[参考文献]

- ・ 森上修「初期古活字版の印行者について一嵯峨の角倉（吉田）素庵をめぐる一」
天理図書館報ビブリオ（一〇〇）一九九三年十月
- ・ 高瀬弘一郎『キリシタンの世紀ーザビエル渡日から「鎖国」までー』岩波書店二〇一三年
- ・ 島野達雄「校注・今村知商『日月会合算法』」二〇〇〇年七月第八七回近畿和算ゼミナール
- ・ 島野達雄「今村知商と吉田光由の『或師』について一「円」と「一」への憧憬一」
二〇一四年十一月第二四三回近畿和算ゼミナール
- ・ 島野達雄「吉田宗恂の運氣論について」二〇一七年三月第二九六回近畿和算ゼミナール

〔付表α〕異体字の使い分け

番号	漢字	A 無刊記	B 元和三	C 寛永三	D 寛永九	パターン
I-1	医：醫	0：684	0：686	0：686	0：686	ABCD
I-2	為：爲	0：506	0：506	0：504	0：505	ABCD
I-3	経：經	0：212	0：212	0：212	0：212	ABCD
I-4	脈：脉	0：180	0：182	0：181	0：181	ABCD
I-5	気：氣	0：142	0：142	0：142	0：142	ABCD
I-6	号：號	0：102	0：102	0：103	0：103	ABCD
I-7	数：數	0：99	0：100	0：100	0：100	ABCD
I-8	溪：溪	0：28	0：28	0：28	0：28	ABCD
I-9	観：觀	0：26	0：26	0：26	0：26	ABCD
I-10	鋭：銳	0：17	0：17	0：17	0：17	ABCD
I-11	灌：灌	0：11	0：11	0：11	0：11	ABCD
I-12	滞：滯	0：10	0：10	0：10	0：10	ABCD
I-13	鎮：鎮	0：5	0：5	0：5	0：5	ABCD
I-14	巡：巡	0：5	0：5	0：5	0：5	ABCD
I-15	爽：爽	0：5	0：5	0：5	0：5	ABCD
I-16	鉛：鉛	0：4	0：4	0：4	0：4	ABCD
I-17	縦：縱	0：4	0：4	0：4	0：4	ABCD
I-18	叫：叫	0：4	0：4	0：4	0：4	ABCD
I-19	遅：遲	0：3	0：3	0：3	0：3	ABCD
I-20	悦：悅	0：3	0：3	0：3	0：3	ABCD
I-21	爽：爽	0：2	0：2	0：2	0：2	ABCD
I-22	齡：齡	0：1	0：1	0：1	0：1	ABCD
II-1	答：荅	5：8	5：8	5：8	5：8	ABCD*
II-2	墮：墮：墮	0：1：7	0：1：7	0：1：7	0：1：7	ABCD*
III-1	薬：藥	55：264	0：320	0：319	0：318	A/BCD
III-2	究：究	13：10	23：0	23：0	23：0	A/BCD
III-3	面：面	11：3	14：0	14：0	14：0	A/BCD
III-4	氷：冰	0：12	6：6	6：6	6：6	A/BCD
III-5	改：改	1：7	0：7	0：7	0：7	A/BCD
III-6	館：館	0：7	3：4	3：4	3：4	A/BCD
III-7	属：屬	2：4	0：6	0：6	0：6	A/BCD
III-8	窓：窓：囪	1：0：3	3：1：0	3：1：0	3：1：0	A/BCD
III-9	葬：葬	2：1	3：0	3：0	3：0	A/BCD

IV-1	青：青	16：8	23：1	24：0	24：0	A/BCD*
IV-2	宜：亘	16：3	18：1	19：0	19：0	A/BCD*
V-1	即：卽	112：0	112：0	0：112	0：112	AB/CD
V-2	繼：繼	0：21	0：21	21：0	21：0	AB/CD
V-3	群：羣	17：2	17：2	19：0	19：0	AB/CD
V-4	蔣：蔣	0：12	0：12	12：0	12：0	AB/CD
V-5	穀：穀	10：0	10：0	0：10	0：10	AB/CD
V-6	慎：慎	9：1	9：1	10：0	10：0	AB/CD
V-7	喪：喪	2：6	2：6	0：8	0：8	AB/CD
V-8	辺：邊：邊	0：7：0	0：7：0	0：0：7	0：0：7	AB/CD
V-9	楼：樓	7：0	7：0	0：7	0：7	AB/CD
V-10	収：收	4：3	4：3	7：0	7：0	AB/CD
V-11	囊：囊	5：0	5：0	0：5	0：5	AB/CD
V-12	函：函	0：5	0：5	2：3	2：3	AB/CD
V-13	襄：襄	0：5	0：5	1：4	1：4	AB/CD
V-14	彝：彛	4：0	4：0	0：4	0：4	AB/CD
V-15	值：值	0：3	0：3	3：0	3：0	AB/CD
V-16	鬱：鬱	0：3	0：3	3：0	3：0	AB/CD
V-17	凶：凶	2：0	2：0	0：2	0：2	AB/CD
VI-1	微：微	22：9	22：9	2：29	3：28	AB/CD*
VI-2	晋：晉：晉	0：0：26	0：2：24	19：7：0	19：7：0	AB/CD*
VI-3	直：直	0：25	1：24	20：5	20：5	AB/CD*
VI-4	富：富	4：18	6：16	22：0	22：0	AB/CD*
VI-5	腸：腸	19：0	18：0	14：4	16：2	AB/CD*
VI-6	夢：夢	13：2	14：1	15：0	15：0	AB/CD*
VI-7	脚：腳	0：12	2：12	12：0	12：0	AB/CD*
VI-8	臺：基：台	4：4：3	6：2：3	8：0：3	8：0：3	AB/CD*
VI-9	戲：戲	5：4	6：3	9：0	9：0	AB/CD*
VI-10	祥：祥	7：0	7：0	2：5	3：4	AB/CD*
VI-11	蟆：蟃	0：5	1：4	2：3	2：3	AB/CD*
VI-12	歛：歡	0：6	1：5	6：0	6：0	AB/CD*
VI-13	塗：塗	4：1	4：1	0：5	1：4	AB/CD*
VII-1	世：世	3：143	52：94	0：146	0：146	A/B/CD
VII-2	視：視	34：61	89：6	95：0	95：0	A/B/CD
VII-3	間：閒	78：0	57：21	63：15	63：15	A/B/CD

VII-4	遊：游：游	20 : 11 : 0	20 : 2 : 9	20 : 7 : 4	20 : 7 : 4	A/B/CD
VII-5	秘：祕	14 : 15	16 : 13	21 : 8	21 : 8	A/B/CD
VII-6	蘇：蓀	14 : 13	17 : 10	27 : 0	27 : 0	A/B/CD
VII-7	略：畧	14 : 7	12 : 11	21 : 0	22 : 0	A/B/CD
VII-8	衡：衡	17 : 0	1 : 16	14 : 3	14 : 3	A/B/CD
VII-9	饒：饒	3 : 0	1 : 2	0 : 3	0 : 3	A/B/CD
VII-10	昏：昏	1 : 2	2 : 1	3 : 0	3 : 0	A/B/CD
VIII-1	權：權	0 : 16	2 : 14	0 : 16	0 : 16	B/ACD
VIII-2	勸：勸	0 : 7	7 : 0	0 : 7	0 : 7	B/ACD
VIII-3	庶：庶	0 : 7	7 : 0	0 : 7	0 : 7	B/ACD
VIII-4	準：準	0 : 5	2 : 3	0 : 5	0 : 5	B/ACD
VIII-5	灌：灌	3 : 0	1 : 2	3 : 0	3 : 0	B/ACD
VIII-6	蹶：蹶	0 : 2	2 : 0	0 : 2	0 : 2	B/ACD
VIII-7	遑：遑	2 : 0	1 : 1	2 : 0	2 : 0	B/ACD
VIII-8	廻：廻	1 : 0	0 : 1	1 : 0	1 : 0	B/ACD
IX-1	隆：隆	11 : 0	11 : 0	0 : 11	5 : 6	AB/C/D
X-1	々	0	9	2	4	A/B/C/D

[付表 B] 字種の異同 上巻 (3桁の 001 等は人物番号)

年代	項目	A 無刊記	B 元和三	C 寛永三	D 寛永九	異同パターン
	姜沆序	夭扎	夭扎	夭札	夭札	AB/CD×3
	上巻目録	崔或	崔或	崔或	崔或	A/BCD
上古	001 伏羲	宓犧	宓犧	慮犧	慮犧	AB/CD
	003 黄帝	鳥号	鳥号	鳥号	鳥号	AB/CD
	006 鬼臾區	鬼臾區	鬼臾區	鬼臾區	鬼臾區	A/BCD×2
	011 俞附	瓜幕	瓜幕	爪幕	爪幕	AB/CD
周	020 醫緩	豎子	豎子	豎子	豎子	C/ABD
	021 醫和	無改	無攻	無攻	無攻	A/BCD
	023 秦越人	何怪	何恠	何怪	何怪	B/ACD
	023 秦越人	重賤	重賤	重財	重財	AB/CD
	023 秦越人	不能□藥	不能服藥	不能服藥	不能服藥	A 闕字 1 字
	024 子儀	子義	子義	子儀	子儀	AB/CD
西漢	028 公孫光	揚中倩	陽中倩	陽中倩	陽中倩	A/BCD
	028 公孫光	揚慶	陽慶	陽慶	陽慶	A/BCD
	030 倉公	表裡	表裡	表裏	表裏	AB/CD
	039 玄俗	常山	常山	常出	常出	AB/CD
三国	048 華佗	於内	族内	於内	於内	B/ACD
	048 華佗	佗	佗	他	他	AB/CD×4
	048 華佗	佗	佗	他	佗	C/ABD×10
	048 華佗	傷動	復動	復動	復動	A/BCD
	048 華佗	執不自生	熱不自生	熱不自生	熱不自生	A/BCD
	048 華佗	荀彧	荀或	荀或	荀或	A/BCD
	048 華佗	腸癰	腸癰	腸癰	腸癰	AB/CD
	050 樊阿	巨闕	巨闕	巨闕	臣闕	D/ABC
西晋	058 皇甫謐	形疆	形彊	形彊	形彊	A/BCD
	062 史脱	大醫	大醫	太醫	太醫	AB/CD
東晋	071 蔡謨	尔雅	尔雅	爾雅	爾雅	AB/CD
南北朝	082 王纂	躬子	躬子	吟子	躬子	C/ABD
	092 崔或	崔或	崔或	崔或	崔或	A/BCD×2
	093 褚澄	而聚	而聚	而娶	而娶	AB/CD
	093 褚澄	涎	涎	涎	涎	A/BCD
	093 褚澄	鷄雛	雞雛	雞雛	雞雛	A/BCD
	095 徐文伯	九錫錫命	九之錫命	九之錫命	九錫之命	A/D/BC

	097 徐嗣伯	治服	治脈	治服	治服	B/ACD
	103 陶弘景	真白先生	貞白先生	貞白先生	貞白先生	A/BCD
	106 馬嗣明	若能差之	若能差之	苦能差之	苦能差之	AB/CD
	107 龍樹大士	假其訖	假其訖	假其說	假其說	AB/CD
隋	122 許智藏	到當	當到	到當	到當	B/ACD
唐	130 孫思邈	仁者	行者	行者	行者	A/BCD
	130 孫思邈	天地之象	天之象	天之象	天之象	A 衍字 1 字
	133 許嗣宗	黃耆	黃耆	黃耆	黃耆	AB/CD
	133 許嗣宗	蒸骨病	蒸骨病	薰骨病	薰骨病	AB/CD
	138 蘇敬	胡子冢	胡子冢	胡子家	胡子家	AB/CD
	141 秦鳴鶴	上攻	不攻	上攻	上攻	B/ACD
	158 王冰	玄珠密語	玄珠蜜語	玄珠密語	玄珠密語	B/ACD
	158 王冰	天元玉策	天元王策	天元玉策	天元玉策	B/ACD
	160 梁新	竹雞	竹雞	竹鷄	竹鷄	AB/CD
	161 吳元禎	謹密	謹蜜	謹密	謹密	B/ACD
	163 石藏用	大醫	大醫	太醫	太醫	AB/CD
	163 石藏用	末蜚螂	末蜚螂	末蜚螂	末蜚螂	B/ACD
五代	167 吳延紹	大醫令	大醫令	太醫令	太醫令	AB/CD
	167 吳延紹	唯中	唯中	喉中	喉中	AB/CD
	167 吳延紹	密詰厨人	蜜詰厨人	密詰厨人	密詰厨人	B/ACD

〔付表 γ〕 字種の異同 下巻 （3桁の171等は人物番号）

年代	項目	A 無刊記	B 元和三	C 寛永三	D 寛永九	異同パターン
	下巻目録	耶律敵魯	耶律敵魯	耶律敵魯	耶律敵魯	AB/CD
宋	171 太宗皇帝	慨罷	既罷	既罷	既罷	A/BCD
	171 太宗皇帝	運周	運用	運用	運用	A/BCD
	171 太宗皇帝	欲求清爽	欲永清爽	欲永清爽	欲永清爽	A/BCD
	171 太宗皇帝	其□□□	其可得乎	其可得乎	其可得乎	A 闕字 3 字
	174 劉翰	此征	北征	北征	北征	A/BCD
	175 王懷隱	隨太醫令	隨太醫令	隋太醫令	隋太醫令	AB/CD
	175 王懷隱	禦製	御製	御製	御製	A/BCD
	175 王懷隱	温水主簿	温水主簿	温水主簿	温水主簿	D/ABC
	176 陳昭遇	日關	日関	日関	日関	A/BCD
	181 郝翁	咽哩	咽唾	咽唾	咽唾	A/BCD
	183 許希	常問	帝問	帝問	帝問	A/BCD
	183 許希	□靈應侯	封靈應侯	封靈應侯	封靈應侯	A 闕字 1 字
	185 僧海淵	天禧	天禧	天禧	天禧	AB/CD
	204 陳子承	聘聒	聘胎	聘胎	聘胎	A/BCD
	208 龐安時	心解	心解	心解	必解	D/ABC
	208 龐安時	桐城	桐城	桐城	桐城	A/BCD
	209 張擴	其妙	其言	其妙	其妙	B/ACD
	209 張擴	侯之	侯之	候之	候之	AB/CD
	212 楊介	生姜	生姜	生薑	生薑	AB/CD×2
	212 楊介	黃著	黃著	黃耆	黃耆	AB/CD
	214 張渙	貸藥	貨藥	貨藥	貨藥	A/BCD
	215 劉混康	冲和光生	冲和先生	冲和先生	冲和先生	A/BCD
	216 寇宗奭	治療失	治療及	治療失	治療失	B/ACD
	221 聶從志	減算	減算	減算	減算	A/BCD
	223 張濟	酢針	酢鹹	酢鹹	酢鹹	A/BCD
	225 王貺	得幸	後幸	後幸	後幸	A/BCD
	227 潘璟	洩洩	溫洩	溫洩	溫洩	A/BCD
	233 婁居中	薑附	薑附	姜附	姜附	AB/CD×2
	235 周順	桃樟腦	排樟腦	排樟腦	排樟腦	A/BCD
	236 杜任	良中	郎中	郎中	郎中	A/BCD
	236 杜任	而良也	而良已	而良已	而良已	A/BCD
	237 許叔微	知司	知可	知可	知可	A/BCD

遼	273 耶律敵魯	耶律敵魯	耶律敵魯	耶律敵魯	耶律敵魯	AB/CD×3
金	279 張元素	爲文理	無文理	無文理	無文理	A/BCD
	281 張從政	名有	各有	各有	各有	A/BCD
	285 陳古老	搭于肺上	搭于肺上	搭于肺上	搭于肺上	AB/CD
元	288 許國禎	司作諫官	可作諫官	可作諫官	可作諫官	A/BCD
	289 李杲	富厚無事	富原無事	富原無事	富原無事	A/BCD
	289 李杲	如鼓	如鼓	如鼓	如鼓	AB/CD
	289 李杲	薑附	姜附	薑附	薑附	B/ACD
	292 羅知悌	世稱	世稱	世號	世號	AB/CD
	295 周眞	產子壯	產子狀	產子狀	產子狀	A/BCD
	300 戴起宗	悟眞□	悟眞篇	悟眞篇	悟眞篇	A 闕字 1 字
	302 許遜	極治之	極治之	拯治之	拯治之	AB/CD
	308 滑壽	徒儀眞	徒儀眞	徒儀眞	徒儀眞	AB/CD
	309 朱震亨	句所習	向所習	向所習	向所習	A/BCD
	309 朱震亨	皆無所稟	皆無所宣	皆無所宣	皆無所宣	A/BCD
	310 葛乾孫	坊論	防論	防論	坊論	AD/BC
	310 葛乾孫	九所稱譽	凡所稱譽	凡所稱譽	凡所稱譽	A/BCD
	310 葛乾孫	而令	勿令	勿令	勿令	A/BCD
	311 呂復	如常	如以	如常	如常	B/ACD
明	330 孫景祥	因恠	因恠	因怪	因怪	AB/CD
	332 盛文紀	裹麪食也	裹麪食也	裹麪食也	裹麪食也	A/BCD
	333 劉宗序	其姊	其姊	其姊	其姊	AB/CD
	333 劉宗序	煨乾姜	煨乾姜	煨乾薑	煨乾薑	AB/CD
	334 王時勉	常勲	常熟	常熟	常熟	A/BCD
	334 王時勉	參著	參著	參苳	參苳	AB/CD
	334 王時勉	百裹	百裹	百裹	百裹	A/BCD
	337 吳傑	腸谷	腸谷	腸谷	腸谷	A/BCD
	340 倪維德	少兒	少兒	小兒	小兒	AB/CD
	347 張頤	信然	信哉	信哉	信哉	A/BCD
	347 張頤	養生	養正	養正	養正	A/BCD
	350 黃師文	其夫	其失	其夫	其夫	B/ACD
	353 吳綬	院判	院判	院判	浣判	D/ABC
	354 沈以潛	爲御醫	爲御醫	以御醫	爲御醫	C/ABD
	370 汪機	醫之傳	醫之博	醫之博	醫之博	A/BCD
	375 韓忭	褌縫掖	褌縫掖	褌縫掖	褌縫掖	AB/CD